

平成 30 年度

東アジア文化創造 NARA クラス
事業報告書

平成 30 年 7 月～11 月

奈良市 文化振興課

東アジア文化創造 NARA クラスについて

■ 東アジア文化創造 NARA クラス

「東アジア文化創造 NARA クラス」は、2016 年の東アジア文化都市における日中韓交流事業の成果を未来へと繋いでいくため、大学生や高校生等を対象とした国際文化交流プログラムである。

平成 29 年度から実施しており、奈良市内でさまざまな分野についての学びを深める「東アジア学びの扉」、中韓から大学生や高校生等を招き交流を行う日中韓交流プログラム、さらに現地に渡って学生たちと交流を行う海外渡航プログラムを行っている。

■ 平成 30 年度テーマ「アートと国際交流」

今年度は「アートと国際交流」をテーマに各プログラムを実施した。「アート」は自らを表現することであり、その手法を学び実践することで、言語や文化の違う人たちとのコミュニケーションにおいてヒントになると考え、企画を行った。

東アジア文化都市 2016 奈良市

「東アジア文化都市 2016 奈良市」では、事業の柱となる「基幹事業」、中国・韓国のパートナー都市とともに開催する「交流事業」、奈良の既存のポテンシャルを生かしさまざまな事業と連携し発信する「連携事業」、そして、東アジアの文化をテーマとした「シンポジウム」で構成。

「交流事業」では、パートナー都市である、中国・寧波市、韓国・済州特別自治道とさまざまな分野において文化交流を行った。

東アジア文化創造NARAクラス

国内プログラム

ガイダンス

東アジア学びの扉
(事前の講座・ワークショップ)

奈良での日中韓交流プログラム

成果報告会

渡航プログラム

中国・寧波での交流プログラム

韓国・済州での交流プログラム

目次

東アジア文化創造 NARA クラス概要	2
国内プログラム	
東アジア学びの扉	4
日中韓青少年アートセッション in 奈良	10
海外渡航プログラム	
寧波青少年交流プログラム	14
2018 東アジア文化都市 JEJU-NARA 青少年文化芸術プログラム	15
活動の成果	
成果報告会（国内プログラム）	16
参加者レポート ① 国内プログラムへの参加を通じて	17
参加者レポート ② 寧波渡航プログラムへの参加を通じて	21
参加者レポート ③ 濟州渡航プログラムへの参加を通じて	24
平成 30 年度事業 成果と課題	26

東アジア文化創造NARAクラス概要

プログラムスケジュール

7月15日（日）ならまちセンター

参加者ガイダンス

第1回 学びの扉「奈良時代、半端ないって！」

講師 高次 喜勝 氏（喜光寺副住職）

7月29日（日）→ 8月19日（日）奈良県立大学 *台風のため延期開催

第2回 学びの扉「現代アートで学ぶ多様性のハーモニー」

講師 西尾 美也 氏（美術家／奈良県立大学准教授）

8月5日（日）奈良市生涯学習センター

第3回 学びの扉「異なるレイヤーへのダイブ！ー身体・ダンスを用いたコミュニケーションの可能性」

講師 砂連尾 理 氏（振付家・ダンサー／立教大学特任教授）

8月25日（土）・26日（日）ならまちセンター

日中韓青少年アートセッション in 奈良

中国・寧波市、韓国・濟州特別自治道から大学生や高校生が来寧し、交流を深める

講師 西尾 美也 氏（美術家／奈良県立大学准教授）

砂連尾 理 氏（振付家・ダンサー／立教大学特任教授）

9月9日（日）ならまちセンター

東アジア文化創造NARAクラス 国内プログラム成果報告会

9月22日（土）～24日（月・祝）中国・寧波市

寧波青少年交流プログラム

奈良から9人の大学生・高校生が中国での交流プログラムに参加

11月2日（金）～4日（日）韓国・濟州特別自治道

2018 東アジア文化都市 JEJU-NARA 青少年文化芸術プログラム(濟州アートフェア連携)

奈良から11人の大学生・高校生が韓国での交流プログラムに参加

参加者応募・選考について

募集期間：平成 30 年 5 月 23 日（水）～6 月 11 日（月）

【選考結果】

応募 24 人（男 3 人、女 21 人）

選考通過 24 人（男 3 人、女 21 人）

参加 20 人（男 3 人、女 17 人） *4 人は選考後辞退

（人）

結果	高校生	大学生	合計
寧波渡航プログラム	6 (男 2 女 4)	3 (男 1 女 2)	9 (男 3 女 6)
済州渡航プログラム	5 (男 0 女 5)	6 (男 0 女 6)	11 (男 0 女 11)
合計	11 (男 2 女 9)	9 (男 1 女 8)	20 (男 3 女 17)
参加辞退	3 (男 0 女 3)	1 (男 0 女 1)	4 (男 0 女 4)

参加者ガイダンス

日 時：平成 30 年 7 月 15 日（日） 13:30～15:30

場 所：ならまちセンター 会議室 3

内 容：事務局よりプログラムの説明を行った。

その後、グループワークを行い、日中韓交流プログラムにおいて行うアトラクションについて、3 班に分かれて実施した。



国内プログラム

事業名：第1回 東アジア学びの扉

日 時：平成30年7月15日（日） 15:30～17:00

場 所：ならまちセンター 会議室3

講 師：高次 喜勝 氏（喜光寺副住職）

テーマ：奈良時代、半端ないって！

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 19人

内 容：

東アジア文化創造 NARA クラス、平成30年度最初のプログラムとして、喜光寺副住職の高次喜勝氏による講座を行った。日中韓の交流プログラムに参加するにあたり、奈良の歴史や文化が持つ魅力を参加者自身に感じてもらうことを目的とした。

講座では、特に飛鳥・奈良時代を中心に、奈良が東アジアの中のどのような場所であったかをお話いただいた。唐・新羅などとの戦いに負けた当時の人たちが、積極的に大陸の文化を取り入れていったことを例に、今を生きる私たちも自分の足りない部分を認める素直さが必要であることがわかる内容であった。

また講座の最後には、「人は出会わないと知識を得られない。今、積極的に人と出会おうとする姿勢が大切」と、東アジア文化創造 NARA クラスにぴったりの言葉をいただいた。

講座終了後には、喜光寺の蓮の葉を使った「象鼻杯」を体験させていただいた。象鼻杯は葉に注がれた飲み物を蓮の茎をストローにして切り口から飲むもので、中国の文人が始めたとされ、日本でも各地の蓮池や蓮田での行事として知られている。ほとんどの参加者にとって初めての体験であり、さまざまなことが大陸から伝来したということを感じることができた。

<実施後アンケート>

- ・ 喜光寺副住職のお話を聞くのは 2 回目で、すごく楽しかったです。奈良時代の方の思考は見習うべき部分もたくさんあると思います。中国・韓国の学生の方たちと積極的に交流ができるように努力したいなと思えるプログラムでした。ハスの葉で水を飲む機会も今後はないと思います。貴重な経験ができて良かったです。
- ・ 自分自身が思っていたよりも奥深く、奈良には中国・韓国とのつながりがあるんだなあと思いました。高次さんのおっしゃっていた「出会い」「ヒト」「ココロ」「モノ」というのが、とても私自身の心に刺さる言葉でした。
- ・ 高次さんのお話を聞いて、行動に対する意識の持ち方を改めて考えさせられる時間になりました。奈良時代の人びとの「シンプルかつ情熱的」な考え方は見習うべきことであると思ったし、今後も行動の前提として持ち続けたいと思いました。中韓との方々との交流においても言えることですが、まずは NARA クラスに参加している方々と積極的な行動をとっていきたいと思います。



事業名：第2回 東アジア学びの扉

日時：7月29日（日）→ 8月19日（日）10:30～15:30 *台風のため延期開催

場所：奈良県立大学

講師：西尾 美也 氏（美術家／奈良県立大学准教授）

テーマ：現代アートで学ぶ多様性のハーモニー

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 9人

内容：

第2回は「現代アート」、特に美術について、美術家の西尾美也氏（奈良県立大学准教授）による講座とワークショップを行った。講師の西尾氏は美術家として国内外でさまざまな作品を制作・公開を行っており、また昨年度からは奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」の美術部門プログラムディレクターとして、プログラムの監修をさせていただいている。

午前中の講座では、「**【ART】とはなにか**」という問いかけからはじまった。参加者はそれぞれ、「絵画のイメージが強い」や「綺麗なもの」、「自由に表現するもの」など、異なった概念を持っているようであった。講師からは、現代アートにつながる芸術の歴史の解説を行ったうえで、現代アートが「**ARTでないものをいかにARTにするか**」という考え方になったこと、そして制作の過程が重要となってくる、いわばアートプロジェクトの時代になってきたことを説明いただいた。

また、講師が手掛けてきた「服」をテーマにした作品や「古都祝奈良 2017-2018」でのチェ・ジョンファ氏による作品、「東アジア文化都市 2017 京都」での西京人の作品などを紹介いただいた。

午後からは参加者全員によるワークショップを実施した。ワークショップは、参加者がそれぞれ思い出のある服を持参し、その服とエピソードを用いたものであった。

他人の服を着て、その服になりきりカメラを前に話をするという内容に、参加者たちは最初とまどいを感じているようであったが、それぞれが服と向き合い、カメラの前で服になりきりエピソードを話した。

講師から、他人の服を着て服になりきることで、声や仕草などが浮き彫りになり、服と共鳴する、そしてそれを切り取ることでひとつの作品となること、また「**不思議なことをした**」という**感覚**が大事であり、それが色々なことを考えるきっかけになるとお話をいただいた。

<実施後アンケート>

- ・ アートとアートではないものを比較した時に、アートではないものは価値のないものと考えていたが、アートではないものにも美術的価値があり、むしろアートという**概念から脱するアンチアートという考え**もあるということを知り、芸術の奥深さを改めて痛感した。

他人の服を着て、その服になりきるという体験は、人生初でかなり緊張したが、いざやってみると面白く、文化祭のクラスTシャツになりきって楽しませてもらった。

- ・ 服に対する考えが変わりました。そして、服の面白さを知れました。先生は、「服は自由に選んでいるようで、実は生まれた国、時代、家庭によって限定されてくる」とおっしゃいました。確かにそうだなと思いました。そしてさまざまな人が自分たちの育った環境に影響され着ている服を1つの作品にしたとき、まさにその作品は**人の多様性のハーモニー**だと思いました。地域（国）の多様性のハーモニーとも言えると思います。服の可能性に触れることができた学びの扉でした。
- ・ 西尾先生の言葉の中で、「**ARTをツールにする**」、「**別の記憶をつくって、日常に帰っていく**」ということが印象に残っています。

実際にワークショップに参加してみて、自分の思い出の服について語ってみること、他人の服になってみることで、**全てが不思議な体験**でした。やっている途中には、最終的にどうなるのか想像も出来なかったけど、「とりあえずやってみる」ということを繰り返すうちに、気づけば何かが出来上がっているということ、それにより日常がまた少し違って見えてくるということが、すごくおもしろかったです。



事業名：第3回 東アジア学びの扉

日時：8月5日（日） 10:30～15:30

場所：奈良市生涯学習センター

講師：砂連尾 理 氏（振付家・ダンサー／立教大学特任教授）

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 13人

内容：異なるレイヤーへのダイブ！身体・ダンスを用いたコミュニケーションの可能性

第3回は振付家・ダンサーの砂連尾理氏（立教大学特任教授）を講師に迎え、身体表現をテーマにしたワークショップを行った。

はじめは講師よりダンスを始めたきっかけなど自己紹介をいただき、その後各参加者による自己紹介が行われた。参加にあたって、ダンスは観るもので特別な技術を必要とする、いわゆる「特権的」なものというイメージが歴史的に作られてきたが、今回のプログラムを通じてダンスは参加するものであるということを感じてもらいたいと趣旨の説明があった。

その後ストレッチを行い、2人1組のワークを行った。背中合わせで立ち上がるワークや支え合いながら歩くワークなどを行ったが、自分と相手の力加減のバランスが難しく、なかなか上手くできないペアが多かった。ワーク後の参加者からの感想としては相手の力を感じて動くこと、これもコミュニケーションのひとつだと思ったという意見があり、講師からは、**頭で出来ることと身体で出来ることのギャップ**を感じる事が大切である、そして異文化と接するときも、頭では仲良くしたいと思っても無意識に怖いという気持ちを抱き身体に出てくる、しかし、それは当たり前のもので、その**ギャップこそコミュニケーションの本質**であると助言をいただいた。

昼食休憩をはさみ午後からもさまざまなワークを実践した。特に最後に行った「自己紹介ダンス」は自分の名前を体の一部を使い表現するもので、一人ずつ音楽に合わせて披露した。参加者からは、与えられたテーマは同じでも人により動きが違うことが面白いなどの意見が出た。

すべてのワークが終了した後、参加者からの感想発表があった。今までダンスをしても動きがおかしいと揶揄されて苦手意識があったが、今日のワークでは固い動きでも個性として受け入れられて、ダンスすることの面白さを感じることができたという感想など、参加者それぞれが1日を通じて感じたことを述べた。

最後に講師から中国や韓国と交流を行う参加者に対して、相手に踏み込むことは確かにリスクな部分もあるが、そこで踏み込むかどうか迷ったときに、今日のことを思い出してもらいたいと、エールをいただいた。

<実施後アンケート>

- ・ 今回のプログラムでのワークショップで、言葉ではない体での表現、自分が伝えたいことをもう一つの伝え方で**言葉が通じなくても伝わる、教えることができる**と感じました。
- ・ 体を使った動きだけで、こんなにもコミュニケーションが取れるとは、最初は正直思っていませんでした。でも、今回いろんな形でグループに分かれて体験してみて、グループの人とも仲良くなれて、本当によかったです。
言葉が通じない中韓の方たちとも、体を使ったコミュニケーションなら、コミュニケーションを取れるのではないかと思いました。
- ・ 即興でなにかをするとか、**創造することに今日まで苦手意識があったのですが、何が起るかわからない面白さ**を今日のプログラムを通じて、凄く実感しました。
ダンスという枠だけではなく、身体表現を通じたコミュニケーションということで、上手下手とか言葉とか、そういうことに関係なく、**誰とでも共有できるワーク**だったので、日中韓の交流もすごく楽しくなりそうだと思います。



事業名：日中韓青少年アートセッション in 奈良

日 時：8月25日（土）26日（日）

場 所：ならまちセンター

講 師：西尾 美也 氏（美術家／奈良県立大学准教授）

砂連尾 理 氏（振付家・ダンサー／立教大学特任教授）

参加者：奈良市 25日：17人 26日：18人 寧波市 両日：11人 濟州道 両日：12人

内 容：日中韓参加者による国際文化交流プログラム

<交流1日目／8月25日>

午前：歓迎セレモニー、3都市紹介、交流ゲーム

ならまちセンター多目的ホールにおいて、中韓参加者23人を大きな拍手で迎えた。冒頭に仲川げん奈良市長から、これから交流を行う日中韓参加者に向けての激励の言葉があった。

その後、**各都市による都市紹介**が行われた。奈良市はクイズ形式、中国・寧波市はパワーポイントによる発表、韓国・濟州特別自治道は自作の絵を使った発表と、それぞれの創意工夫がみられた。

続いて、3都市の親睦を深めるため、**奈良市の参加者が考えた交流ゲーム**を行った。1つめはジャンケン列車ゲーム、2つめはジェスチャー伝言ゲームを行った。各都市の参加者ともぎこちない様子があったものの、ゲームを通じてコミュニケーションを重ねていった。



午後：身体表現ワークショップ（講師：砂連尾理氏）

第3回東アジア学びの扉でも講師を務めていただいた**砂連尾理氏**による日中韓ワークショップを実施した。2人1組になり相手を誘導するワークやゆっくりと寝起きするワーク、相手の動きを真似るワークなど、さまざまなワークを日中韓の参加者が行った。学びの扉でも行った自己紹介ダンスも、日中韓混合のグループで自分たちの名前をつなげて、身体の一部を使い音楽に合わせ表現した。

動くことが中心のワークショップで、言葉の壁を感じるものが少なく、参加者同士の溝を埋めることができた。特に最後の自己紹介ダンスは第3回東アジア学びの扉においても実施したワークであったが、**日中韓のグループで行うことで、動き自体の共有につながり、コミュニケーションが作品として表現されるものであった。**



<交流2日目／8月26日>

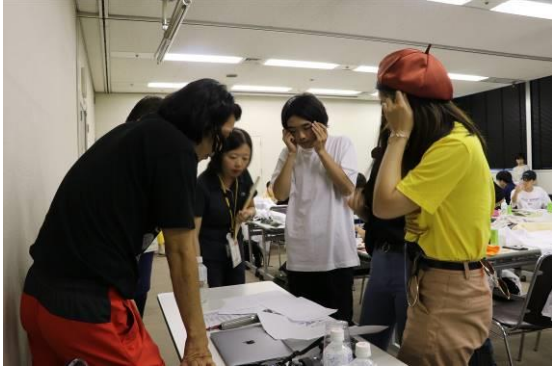
交流2日目は、日中韓の参加者と西尾美也氏による美術ワークショップを行った。

参加者全員に白いワイシャツが配られ、着用するように講師から指示があった。ワークショップは11のグループに分かれ、グループごとに「秘密のルール」をつくり、そのルールを基に作りたい服をそれぞれがデザインし制作するものであった。制作にあたっては、グループ内でコミュニケーションを経る必要があり、そのコミュニケーションが作品として表れてくる、いわば「**関係性の造形**」というものであった。

午前中は「秘密のルール」を決めて、デザインを行ったが、各グループのアプローチはさまざま、どんなテーマにするかを話合うグループ、共通点を探すため自己紹介を行うグループなど、それぞれが違う方法で作業をすすめた。おおまかなプランが決まった後は、講師に相談の上、制作へとうつった。

午後からはすべてのグループが作品の制作に取り掛かった。1人1着を作るため作業自体は静かに進んだが、完成が近づくと次第に参加者同士でのコミュニケーションが活発になった。

完成後は、全11グループがファッションショーのような形で、ポーズを取り、作品のテーマなどを発表した。同じテーマになったグループもあったが、出来た作品はグループごとにまったく違ったものであった。参加者のなかには裁縫が得意でない者もいたが、上手く作ることが目的ではなく、**コミュニケーションを経て制作を行うという過程**にこそ、ワークショップの意味があり、参加者は疲れを見せず最後まで集中してワークに取り組んでいた。



<実施後アンケート（中韓参加者）>

[寧波参加者]

- ・ 今回のイベントを通じて、新しい友達がたくさんできて嬉しかったです。交流の中で、**中日韓三ヵ国の文化や歴史の共通点と相違点**を感じていました。視野が広くなりました。交流を通じて友情を深めることは非常に有意義なことです。今回の交流を通じて、他の国のことをたくさん勉強することができました。将来の生活の中で、積極的に周りの人とコミュニケーションをとりたいと思います。また、外国語に興味を持って、これからもっと頑張りたいです。
- ・ 今回の交流を通じて、**自分のコミュニケーション能力を高めることができました**。新しい友達がたくさんできて嬉しかったです。交流の中で違う国の文化や習慣などを少し理解することができました。文化や言葉の壁がありますが、皆は積極的に方法を考えて、英語、翻訳アプリなどでコミュニケーションをうまく取ることができました。学生たちも先生たちも親切で、徐々に距離が近くなりました。今回の交流を通じて、外国語の興味を持つようになりました。将来はしっかり勉強して、外国語を使う仕事がしたいと思います。

[濟州参加者]

- ・ 共に活動しながら、**お互いに尊重・配慮する雰囲気**を感じ、本当に参加して良かったと思った。これからもこのような事業が続いてほしい。今回、講師のお二人に教えていただいたことはとても新鮮で、多くのことに気づかされ、アイデアを創作する方法を学んだ。**創作は簡単ではないが、生活の中にモチーフになるものが溢れていて、既存のものから新しいものを創り出すことを学んだ経験**は、これから先も必要な時に思い出さうと思う。
- ・ いろんな活動をしたが、その中で、踊りながら自分の名前を表現したことと 7 分間寝ころんだことが印象深かった。最初は 7 分間もどうやって寝ころぶのかと思ったが、やってみると、雑念なく集中でき、とてもよかった。帰ってからも時々やりたい。また皆と力を合わせてミッションを達成したことも印象深く、それを通じてさらに仲良くなれた。今回の交流で**協同性**を学んだ。国は違うが一つになった姿を見て多くのことに気づいた。大学のチームプロジェクトで外国の友達に会うことがあるが、今回の経験があるので、彼らとも仲良くなれると思った。大学の外国人の友達の助けになりたいと思う。そして将来、グローバルな人になって韓国と諸外国が交流するのに役立つ人になりたい。

海外渡航プログラム

事業名：寧波青少年交流プログラム（中国・寧波）

日 時： 9月22日（土）～24日（月・祝）

場 所：中国・寧波市 各所

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 9人（引率2人、添乗員1人、通訳1人）

内 容：

中国・寧波での交流プログラムは2泊3日の行程で、交流日は1日であった。

プログラム当日の午前は寧波の名所である天一閣と寧波博物館の見学を行った。天一閣は現存する中国最古の書庫（図書館）寧波が誇るの観光地であり、参加者も興味を持ってガイドによる解説を聞いていた。また、寧波博物館は全てを見ることはできなかったが、日本とのつながりを感じることができる展示などもあり、参加者にとって知識を得る機会となった。

午後は交流会場である寧波市甬江職業高級中学で、校内の無形文化遺産展示館を見学した後、現地の生徒と一緒に菓子作りを体験した。

講師による作り方の説明の後、調理室に移動し月餅と白玉団子の調理を行った。3～4人ずつに分かれて、日本と中国、それぞれの参加者がコミュニケーションを取りながら、菓子を作った。

現地の生徒と交流できたのは半日であり、親交を深めるには短い時間であったが、奈良での日中韓交流を経験していた参加者たちは物怖じせずに、中国の生徒たちへ話しかけており、成長を感じることができた。



事業名：2018 東アジア文化都市 JEJU-NARA 青少年文化芸術プログラム（韓国・済州）

日 時： 11月2日（金）～4日（日）

場 所：韓国・済州特別自治道 各所

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 11人（引率2人、添乗員1人、通訳1人）

内 容：

韓国・済州でのプログラムは、現地で開催されていたアートイベント「済州アートフェア」に合わせて行われた。

11月2日に到着後、早速同イベントを見学した。テドンホテルなど、宿泊施設を会場とした美術展示で、部屋ごとにさまざまなアーティストが作品を展示していた。

2日目からはじまった交流プログラムは「旧市街地の宝探し」と題し、アートをテーマに街歩きをしながら、一つの地図を創り上げるというものであった。

交流には日韓の学生に加えて、日本人留学生3人も参加した。街歩きでは、伝統的な家屋の見学や済州城跡、東門市場など、済州の今と昔を学ぶことができるものであった。それぞれの場所で、絵を描いたり、買い物ミッションが行われたりと、親交を深める工夫を感じることができるプログラムであった。最後は、1枚の大きな地図が完成し、参加者から感想、そして講師や事務局からの総括でプログラムは終了した。

プログラムは、自身の感性を大切にし、独自の価値観を持つことの大切さを訴える内容であった。済州からの参加者の一部は奈良でのプログラムに参加しており、さらに親交が深まることを感じた。



活動の成果

事業名：東アジア文化創造NARAクラス 国内プログラム成果報告会

日 時：平成30年9月9日（日）9:30～11:30

場 所：ならまちセンター 会議室3・4

出席者：13人

内 容：

国内プログラムに参加したことによる自らの変化や成長について気づくための場所として、成果報告会を実施した。海外渡航プログラムを前に、日中韓交流の成果と反省を振り返ってもらう場にもなった。

成果報告会では、国内プログラムに参加レポートの発表を行い、実際に交流をしたことで感じたさまざまなことをグループワーク形式で話してもらい、最後はグループごとに発表を行った。

特に海外渡航の経験がない参加者は、プログラム参加で中国や韓国に対しても持っていたイメージの変化が大きかったと見受けられる。どの参加者にも、異なる文化を持つ人と友人になれたことの喜びを感じることができ、また一方で言葉が伝わらないもどかしさもあったようで、語学の勉強に取り組むことへのモチベーションにつながったと思われる。



■ Nさん（大学4年生）

今回の国内プログラムへの参加は、本当に多くのことを体験しながら学ぶことが出来る、貴重な機会であったと感じています。アートというツールを用いての「コミュニケーション」は、通常は形を持たず、目に見えないはずの人間関係を、形あるものに変えて表現し、人はそれらを視覚的に捉えることで、他者との関係の築き方について、より現実なものとして考えられる可能性を持ち、その延長線上にある自己と向き合うきっかけになり得るのではないかと思います。また、砂連尾先生や西尾先生のワークショップは、想像以上に単純な作業が多く、しかし決して淡泊なものではなく、個人やグループのそれぞれが抱える背景が、作品として表現されていく点が印象的でした。

プログラムを通じて最も記憶に残り、繰り返し考えさせられた言葉は、砂連尾先生の「頑張らないことを、頑張る」という言葉でした。この言葉は、コミュニケーションに限らず何事も、「頑張らない」という選択肢を考えたことがなかった私にとって、新しい発想の学びでした。そして、その意識が備わることで、気持ちに余裕が出て、柔軟な表現や視野の拡大に繋がるかもしれないという期待感から、「頑張らない」ことの意識を心がけました。しかし、「頑張らない」ことは言葉で理解する以上に、変化に対しての抵抗や不安感からか、身体での適応は難しく、時間が経過するほどその意識は焦りへと変化していきました。この気持ちを、抱えながらプログラムに参加していた為、全てを終えて振り返っても、楽しかった時間の記憶よりも、時間が進むにつれて増えていく不安や、焦りと共にひとつずつ課題を片付け乗り越えた時間が、多く思い浮かびます。これらの悩みを抱えて時間を過ごした今回の経験から、今までいかに不安や焦りを感じる状況を避け、自分が心地良いと感じる環境で、恥をかかず失敗をしない為の手段として、頑張ることを選択し、意識を向けてきたということを知ることができました。そして、この機会に発見した私の弱点や、「頑張らない」という意識を、強い意志と気持ちを忘れず持ち続け、今後も向き合っていきたいと思います。

また、中国や韓国の参加者の方々と二日間を過ごして、言葉や文化の壁を感じるものが全く無かったとは言えませんが、その少しの距離を埋めるかのように、各々が持つ全ての手段を使用して、互いの言葉や文化を素早く吸収し、環境に適応している様子が多く見られ、普段あまり見られない光景であることから、少し驚きました。しかしその光景を見て、自国と他国の歴史的背景を知ることが重要ですが、その情報にだけ縛られるのではなく、自由に互いの文化に興味関心を持ち、他者から聞く話だけではなく、自らが実際に足を運び、興味関心に触れ、何かを感じるという個人の経験が、現在から未来にかけて個人という領域を越えて、大きな役割を持つのではないかと感じました。

■ Kさん（大学4年生）

はじめに

私が本プログラムに参加した目的は、異なる文化で生きる人たちがアートを通して同じ場に共存することで生まれる相互作用を実践的に学ぶことでした。私は現在大学で、障害のある人の芸術活動について研究をしています。そのなかで、障害の有無に限らず、「人と違うこと」をマイナスに捉える考えに違和感を覚え、「人と違うこと」に面白さを見出し、差異を楽しむ価値観をアートワークショップはまさにそのような実践であり、研究に活かせるのではないかと思い参加しました。

概要

残念ながら台風の影響で延期になった第2回「現代アートで学ぶ多様性のハーモニー」には参加することができませんでしたが、それを除く4つのプログラムに参加しました。第1回の東アジア学びの扉では、喜光寺副住職の高次喜勝さんに奈良時代の歴史を楽しくわかりやすく教えていただいただけではなく、人生の心得も学ぶことができました。第3回「異なるレイヤーへのダイブ！ー身体・ダンスを用いたコミュニケーションの可能性」では、身体表現ワークを通して即興で生み出す表現の面白さを感じるとともに、言葉がなくても身体一つで相手と通じ合うことができるということを学びました。

そして、2日間にわたる交流プログラムでは、中韓の参加者を迎え、密度の濃い時間を過ごすことができました。1日目のワークショップでは、第3回に引き続き砂連尾理さんを講師に迎え身体表現をテーマに交流を行いました。どこかぎこちないままスタートしたワークでしたが、身体を動かしていくにつれ自然とコミュニケーションが増えていくのを感じました。それは言葉でおこなうコミュニケーションだけではなく、ジェスチャーで伝えあったり、アイコンタクトをしたり、そして砂連尾理さんがそのような動きも一種の身体表現でありダンスといえるのではないかとおっしゃっていたのが印象的でした。2日目には、西尾美也さんを講師に迎え、グループごとに秘密のルールを作り、統一の象徴である白のカーターシャツをそれぞれの色でデザインしていくというワークショップを行いました。最後には、全員が同じものを着ていた最初とは全く違うかたちで、それぞれの手に残り、思い出とともに持ち帰りました。

まとめ

私は今回プログラムを通して、アートが生まれる場では文化や言葉の違いから生まれるディスコミュニケーションも面白さになることを実感しました。特に交流プログラムでは、やはり国ごとに「違い」を感じましたが、それを楽しめるような状況の変換がアートによって行われていました。あの時間、あのメンバーだからこそ生まれるものがあり、その経験がすごく大切なものになりました。この経験を活かし、「違い」を楽しめるような場づくりの研究を進めていきたいと思います。

■ Nさん（高校2年生）

私は今回このプログラムに参加して、いろいろな人と交流して気づいたことは人と仲良くなる手段は言葉を交わす以外にもたくさんあるということです。特に砂連尾さんの講演を受けた時にそう思いました。人と触れ合い協力して何かを成し遂げることで距離が言葉を交すより近くなっているような気がしました。中国と韓国の方が来られた時の砂連尾さんの講演の中の一つに、相手を信じて自分は目を閉じて相手に誘導してもらおうという遊びがありました。その遊びはとても印象的でそしてそれを一緒にしてくれた韓国の方とは仲良くなることができました。なぜかと考えたときにやっぱり初めて会う相手で言葉は通じないそんな状況にも関わらず自分は目をつぶって相手のことを信じて動かなければならない、少しの緊張と恐怖を抱えていました。しかしそれを乗り越え誰にもぶつからなかったり、危ない事にならなかったことで、相手を信頼してよかったという安心感と、そのことを成し遂げたことで二人の間にうれしさがこみあがり、言葉はよくわからないですがやったーやうまくいってよかったというようなことを言いあい間にあった、言葉の壁が見えなくなったように感じました。

最初のプログラムが始まったばかりの時の昼食は正直あまり話しませんでした。お互いに言語がわからず英語でコミュニケーションを少しはとるものの、やはり翻訳機が手ばなせずいちいち一つの話をするのも結構時間がかかりました。自分が伝えたいことが相手に違うように伝わっていたり、その話に興味がありもっとその話を続けたいのに何と断言していいかわからない。昼食の時間だけで本当につかれたことを思い出します。しかし二日目の昼食ではとてもたくさんしゃべりました。昼食前からずっとしゃべり自分たちがしなければいけないことも忘れてしまうくらい話に夢中になりました。何の話に夢中になっていたかという興味の話です。これは本当にすごいと思いました。私のグループは私を除く三人が絵を描くことが趣味でした。その絵を見せてもらうと本当に描いたのというくらい繊細で美しい描写で感動し感嘆しました。そこからどんどん話がふくらみつついつい夢中になってしまいました。そこで思ったことは共通の好きなものを見つけると言語をこえ仲良くなれるということです。写真を見せられた時も私はわあなどしか言わなかったのですが、相手には自分がとても関心をよせているということが伝わりました。この共通して好きなものを見つけるとするのは本当に相手と距離を縮めるいい方法だと思います。そこから連絡先を交換し、なんとなくのジェスチャーで相手の言いたいことがわかるようになりました。こういった経験を積み私は、人と仲良くなる手段は言葉を交す以外にもたくさんあるということ学びました。確かにその国の言語を話せる方がもっと密接な関係になりそのあとの進展もあったと思います。しかし私は向こうの国の言語がわからないというハンディを持ちながらいかに仲良くなり、どこまでの関係を築けるかとやってみたところ、つい最近中国の方とメールをかわすほどまで仲良くなりました。しかし特に活動中には話していません。時に相手の言っていることがわからず笑いでごまかしたこともありました。そんな中でもやはり興味の話は大きく今は楽しんでメールをかわしています。違う国の人と仲良くなる

ということは多分簡単なことではないと自分は感じています。しかし、自分があなたにこう伝えたいやこう思っているなどを伝えたい熱意と少しの勇気で自分の人間関係や価値観が広がり人生がもっと豊かなものになると感じました。

■ Wさん（高校2年生）

昨年度の韓国・済州特別自治道への渡航を経て、東アジアの文化により興味を持ったので、今年は中国の寧波市への渡航プログラムに参加させていただきました。関西空港から上海空港へ向かう途中に済州道が見え、去年の日中韓交流の記憶をはっきりと思い出して、寧波に到着するまでずっとわくわくしていました。

今回の交流は2日目がメインで、甬江職業高級高校の学生と月餅と白玉団子を作りました。同じ班の女の子2人は、はじめは非常に緊張している様子でしたが、私が英語で話しかけるとニコッと笑って打ち解けてくれました。お互い高度な英語は話せないものの、表情やジェスチャー、簡易な英語を用いてコミュニケーションをとったりして仲良くなることができてとても嬉しかったです。また、去年済州で仲良くなった中国の友達が学校に会いに来てくれて、まさかの再会を果たすことができました。写真をとったり、トシンさんを通して話したりしました。この時に私は「もっと英語を上達したい」「中国語でいつか話したい」と強く思いました。その日の夜、ホテルでは夏の間にあった奈良での交流でできた友達とも再会し楽しい時間を過ごしました。中国人の友達はみんな優しくしてくれて、日本人が中国人に対してもつマイナスなイメージは一概に言えることではなく、根本から見方を変えていくべきだと感じました。中国でできた友達は一生の友達であり、絶対またいつか会って中国語で話そうと心に決め、また会おうという約束もしました。

現地でのバス移動で街や交通の様子を観察していると、日本とのちがいを沢山見つけました。常に鳴り響くクラクションの音、当たり前のように赤信号を渡る人々、ヘルメットを着用せずにバイクにまたがる人々、ネオンの綺麗な看板、何人の人が住んでいるのか分からない程高い集合住宅の群れなど、はじめて見るものや日本と少し変わったものであふれていました。私は寧波市に行く前にインターネットやパンフレットなどで現地のことを少し調べてはいたものの、想像を超える異国感はやはり現地に足を運んでみないと分からないものだと体感することができました。

今日、東アジアには日中、日韓問題の深刻化と共に人々が無意識のうちにそれらから目を背けてしまうという「現実」があります。私のような社会的な地位や権力を持たない高校生がすぐに解決するのはたしかに難しいですが、私は2回の渡航と奈良での交流での中韓の子達とのコミュニケーションを通して、各国との壁をあまり感じずに話し、笑い、時には助け合えること、言語は違うけれど大切な大切な友達になれることを知りました。「現実」と真正面から受けとめ「事実」を伝えることこそ、私の交流した意味なのではと考えました。貴重な経験をさせていただいた奈良市の事業の方々、現地スタッフの方々をはじめとする関係者のみなさんすべてに感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました！

■ Sさん（高校2年生）

空港で降りたとき、空港の規模の大きさに驚いた。その後道路を車で走っていたら、高層マンションが立ち並んでいる一方、ボロボロの家もあり、早速中国の経済格差を感じた。35 kmの橋や、車の多さにも中国のビッグスケールさが表われていたし、寧波の街は活気にあふれていた。

寧波に来て一番驚いたことは、交通マナーの悪さで、道を歩くのは怖かった。けれど不思議なことに、1度も事故を見なかった。誰もが運転マナーの悪さを認識しているから、逆に油断をしないのかなと思った。

天一閣では、中国らしい建物をじっくり見ることができて、中国に来た実感が改めて湧いた。アジアで一番古い図書館だと聞いてびっくりしたし、数百年間も火災などで消失しなかったことを疑問に思っていたが、消火用の池があるのを見て、本を必ず火災から守りたいという本への強い気持ちが数百年間受け継がれてきたことが分かった。アジアで一番古い図書館として現存しているのは本に対する気持ちからの行動だった。

また、天一閣が麻雀の発祥地で、美しい貝の駒や紙の駒など、木以外の素材のものを見れたのは貴重な体験だった。今のゴルフのように、外交の手段として麻雀が行われていたことに少し笑った、どの時代でも外交には娯楽が必要なかもしれない。

天一閣の建物の特徴で一番目についたのが、屋根の先がそり返っているということで、車窓から見えた天一閣以外の伝統的な建物も屋根の先がそり返っていた。日本のお寺もややそり返っているが、それよりも大きくそり返っていたので、なぜそのように造ったのかを調べようと思う。

月餅作りは、生地を厚さを均等にしてあんこを包むのが難しく苦戦したが、そのわけを教えてもらったことでコミュニケーションをとれたので良かった。

自分の班は日本人1人、中国人2人で、僕は話す日本人がいなかったので、なんとか英語で会話し、お互い完璧な英語ではないからこそ言っている意味を推測したり、ジェスチャーを加えて次第に打ち解け合えるようになった。

僕は渡航前は、中国は受験社会で、学生は皆勉強で疲れていると思っていたので、あまりジョークは言わないし、笑顔も少ないと決めつけていた。けれど、実際話してみると、中国人学生たちの中にはひたすら笑っているような子もいたし、ジョークも言いあったりして楽しく過ごせた。日本人はよく人見知りと言われていると聞くけど、全員がそうではないのと同じで、人それぞれであることを強く実感した。それに加えて、今回訪れた学校はそれぞれの生徒が進みたい道を歩むための専門学校なので、毎日自分の好きなことをしているからこそ、ずっと受験勉強をしている人よりものびのびとしているのかもしれない。お菓子はとてもおいしかったし、中国の伝統に触れられたことは嬉しかったけど、それ以上に、この短時間のなかでも中国人学生と仲良くなって、Wechatでも話せたことの方が嬉しかった。なぜなら、文化の壁や、警戒心、政府間の仲良さなど周りの状況や一般

論にじゃまされずに、個人を個人として見てその人だけを見ることができたから、とても大切な収穫だと思う。

中華料理を堪能できて、とても満足した。蛙は想像以上のおいしさだった。3日間だけだったが、寧波の街の様子、人の様子、それからプログラムに参加した日本人学生たち、色々なものを見て知って、自分の認識する世界の範囲が広がった渡航プログラムにできたと思う。

参加者レポート ③濟州渡航プログラムへの参加を通じて

■ Iさん（大学1年生）

私が今回、この濟州渡航プログラムに参加して、自分が成長したと感じられる点が特に二つある。

一つ目は、様々な人と交流し、コミュニケーションを図ることができるようになったという点である。このプログラムでは、一緒に参加している日本人の学生や韓国人の学生、準備・同行してくださった先生方、濟州の地域の人々など本当にたくさんの方と交流する機会があった。もちろん年齢や性別、国籍などはそれぞれ異なるが、日韓お互いの理解を深めるという同じ目標に向かって活動することで、言葉や文化の違いという壁があっても自分の気持ちを伝えたいという強い意志があれば、コミュニケーションをとることができるのだと学んだ。このような経験が出来たので、今後生活していく中で出会う人々と交流する際に大きな自信になると思う。

二つ目は、濟州島「ならでは」の魅力に気付くことができたという点である。濟州島に行くのは今回が初めてだったが、これまでにテレビ番組などで濟州島の名物や観光地が紹介されているのを見たことがあったので、詳しく知っているつもりでいた。しかし、実際に訪問してみて、アート作品を鑑賞したり、韓国の学生と自分の足で町や市場を歩いて絵を描いたりすることで、映像や写真では決して表現されない、濟州島「ならでは」の雰囲気や自然などの環境、濟州の人々の生活を発見・体感することができた。観光地をただ巡るだけでは分からない良さを見つめる貴重な機会であった。

このプログラムに参加して成長できた点を活かして、今後は大学での異文化の学びの理解に繋げたい。また、今回作ることのできた思い出や経験・発見を家族や友人などに伝えることで、自分の周囲の人たちにも濟州島を「訪れてみたい。」と思ってもらえるよう努力していきたい。

参加した当初はどのような三日間になるのか、役目を果たすことができるのかなど、不安に思うこともあったが実際に参加してみると、三日間はとても短く感じられ、たくさんの経験をすることができた。今後もしこのような事業があれば、積極的に参加して新たな知識を得たいと考える。

■ Kさん（高校3年生）

私は、チェジュ渡航の11月2日から4日まで行われたアートプログラムで素敵な出会いやアクティビティを通して様々なことを学びました。

まず一日目は、韓国に到着してすぐアートフェアへ行きました。そこではホテルや宿舎が美術館のようになっていて一部屋一部屋に各アーティストの作品が飾られていました。どのアーティストさんの作品も個性的でいろんなテーマがあり、とても面白いと思いました。韓国のアーティストさんだけではなく日本のアーティストさんもたくさん出品されていて、ここにも日韓のつながりがあることに大変驚きました。さらに、そこでたまたま出会ったアーティストさんが別府から来た方で、自分の高校である立命館の大学のほうからの募集で来たという事実を聞き、個人的にもつながりを感じてとても良い出会いをしたなと感じました。

二日目には、奈良に来てくれていた友達や、韓国の大学生、そこに通う日本の大学生との交流アクティビティを行いました。交流の最初に自己紹介を、絵を通して行うことで、言語の壁がない中でコミュニケーションが出来たので、とても伝わりやすく、相手のことをアートを通じて知ることができました。それに加え、チェジュ島の特別区の方々が私たちが楽しく学べるようにいろいろな工夫をしてくださったので、韓国の友達とチェジュ島を楽しく、深く学ぶことができました。韓国の昔の家を訪れた時には、キャンバスを見ないで絵を描くという技法を使ったアクティビティを行いました。二日目のアクティビティで一番印象に残ったのは、チェジュの市場の中で自分たちのグループのミッションである文字が入っているものを探して買うということでした。このような面白いフィールドワークのおかげで、頭を使って学ぶだけではなく体の五感すべてを使ってチェジュと知り、奈良とチェジュの交流を深められてとても内容の濃い充実した一日を過ごすことができました。

三日目はチェジュ島について深く知ることのできた一日でした。私たちは、チェジュができた伝説の場所とされている三つの穴を訪れました。そこには、どう見ても人間が作ったとは思えない、不自然だけどなぜかその場に昔からあったような穴があり、とてもパワーを感じました。それは、周りの木々がその穴に向かってお辞儀をしているようにも見え、その穴の部分だけが霧のような白いものでおおわれている神秘的な場所でした。さらに、博物館にも訪れ、何百年も前の陶磁器や、文書などが保管されており私たち人類の歴史までを感じさせられました。

これらの二泊三日のチェジュ島での文化交流や奈良でのワークショップで、より韓国のこと、奈良のことを知り、好きになり、アートを通してお互いを知ることができてとてもよかったです。まだまだ歴史的対立が残っていますが、一個人としてこのように交流を深めることができ非常に良い経験をさせていただきました。ありがとうございました。

平成 30 年度事業 成果と課題について

<成果>

- 本プログラムは日中韓の文化の力による平和構築をめざした「東アジア文化都市 2016 奈良市」事業を契機として始まった。参加者が直接中国や韓国の学生と触れ合うことで、それまで抱いていた先入観や偏見を見直すきっかけとなったことが見て取ることができた。
- 「東アジア学びの扉」においては、日中韓交流でワークショップを行う講師による事前講座的な位置づけとなり、プログラムの趣旨や目的を参加者により深く理解してもらえるものとなった。特にワークショップ形式のものが多く、実際に身体を動かすことを取り入れたことで、積極的な姿勢をみてとることができた。
- 今年度のテーマである「アートと国際交流」は、アートの手法を学び実践することで、言語や文化が異なる人とのコミュニケーションのヒントとなることを狙ったものである。「日中韓アートセッション in 奈良」での、身体表現ワークショップや美術作品共同制作の場は、日中韓参加者それぞれが自らを表現する内容となり、単に親睦を深める交流企画ではなく、表現を伴うアートプログラムとして成立したと考える。
- 中韓渡航プログラムにおいては、寧波市並びに濟州特別自治道、それぞれの多大な協力のもと、安全に行程を終えることができ、参加者にとって満足度の高いものとなった。中国や韓国への渡航は難しくない時代ではあるが、現地で同世代の人と親睦を深める機会は留学などの機会がない限り、多くない。本プログラムは海外への関心はあるが渡航経験がない人に対して、大変有意義なものだと考える。

<課題>

- 「歴史・文化」をテーマにした前年度と異なり「アート」をテーマにしたため、奈良の魅力を伝える内容が少なかった。特に「日中韓アートセッション in 奈良」では交流プログラムのなかで奈良の各所を回るような企画がなく、奈良の参加者が中韓参加者に奈良を紹介する機会が、プレゼンテーション以外になかった。
- 昨年度に比べ参加応募者が少なかった。事業内容への興味・理解の促進につなげる方策を検討したい。
- 「東アジア学びの扉」は各回の参加者に欠席が多く見られた。台風による延期実施の影響も大きいですが、ワークショップ形式の場合、準備の都合などもあり直前の欠席は講師への負担も生じる。次年度以降は、参加者選考時に出欠予定を確認し、欠席が多い応募者は参加をお断りするなどの運営面での工夫が必要である。
- 中韓渡航プログラムはどちらも 2 泊 3 日であったが、交流日数が 1 日では交流を深めるには短い。現地の事務局などとの協議を重ね、日程も含めてプログラム内容を検討していきたい。

奈良市文化振興課

奈良市二条大路南一丁目 1-1

☎0742-34-4942 📠0742-34-4728

平成 31 年 1 月